

世界初の反原子炉運動

東京電力福島第1原発事故が2011年3月に起きる60年ほど前。住民による世界初の反原子炉運動が宇治市で繰り広げられた。立ち上がった市民や茶業者、伏見の酒造関係者らが「放射能で汚染された水が宇治川に流れる」「地震や水害に、人の落ち度もある」と、安全性に疑問を投げかけ、激しく抗議した。

戦後12年の1957年1月、京都大が研究用原子炉を宇治市木幡地域の元陸軍火薬製造所跡に建設すると発表した。太平洋のビキニ環礁で米国の水爆実験で第五福竜丸が被ばくした事件から間もなかった。

魚への放射能汚染で「原子マグロ」との言葉が生まれ、不買につながった。原子炉設置に宇治市の茶業者が真っ先に反応した。「宇治に原子炉がきたら宇治茶が売れなくなる」。大騒ぎになり、会合を重ねた。住民運動で阻止することを

折り鶴と原子の火

核をめぐる京都史

3

「宇治茶の歴史ふつとぶ」



宇治市の原子炉予定地を視察する国会議員を取り囲んで陳情する茶業者ら—1957年6月



決め、宇治原子炉設置反対期成同盟を立ち上げた。

50年代から国は原子力開発を推進する。戦時中、京大や東京大、大阪大の原子物理学者は軍部の要請で原爆開発に関わったが、戦後は「平和利用」に使命感を見出していた。「核兵器に関する研究は一切行わない」ことをうたい、原子力研究は、民主・自主・公開の3原則を徹底するとした。

55年に日本学術会議の「原子力に関するシンポジウム」で、関西と関東に研究用原子炉を1基ずつ建設する方針がまとめられた。

京大はノーベル賞受賞者の湯川秀樹博士を委員長に、関西研究用原子炉設置準備委員会を立ち上げた。宇治市と舞鶴市の2案から、阪大などの共同利用に利便性が高い宇治案が選ばれた。

「放射能は怖い」。反対運動に参加した元茶農家の平岡久夫さん(79)「宇治市木幡は、もし何かあれば、宇治茶の長い歴史は一瞬でふつとんでしまうという危機感があった」と話す。だが、「大変だとはなっても、何が何だか分からない。我々には原子力の知識がなかった」

宇治への原子炉立地には科学者からも疑問の声が上がった。阪大の化学者植田龍太郎教授が宇治を訪れた。セシウム、ストロンチウム：聞いたこともない言葉

かしのぶ



55年に日本学術会議の「原子力に関するシンポジウム」で、関西と関東に研究用原子炉を1基ずつ建設する方針がまとめられた。

京大はノーベル賞受賞者の湯川秀樹博士を委員長に、関西研究用原子炉設置準備委員会を立ち上げた。宇治市と舞鶴市の2案から、阪大などの共同利用に利便性が高い宇治案が選ばれた。

「放射能は怖い」。反対運動に参加した元茶農家の平岡久夫さん(79)。「宇治市木幡」は「もし何かあれば、宇治茶の長い歴史は一瞬でふっとんでしまうという危機感があった」と話す。だが、「大変だとはなっても、何が何だか分からない。我々には原子力の知識がなかった」

宇治への原子炉立地には科学者からも疑問の声が上がった。阪大の化学者榎田龍太郎教授が宇治を訪れた。セシウム、ストロンチウム：聞いたこともない言葉

だったが、平岡さんら住民は放射性物質汚染の恐ろしさと、地震や水害を思えば「絶対安全とはいえない」ことを学んだ。万が一事故が起これば淀川に放射性廃液が流れ込むと、大阪など流域住民にも反発が広がっていく。

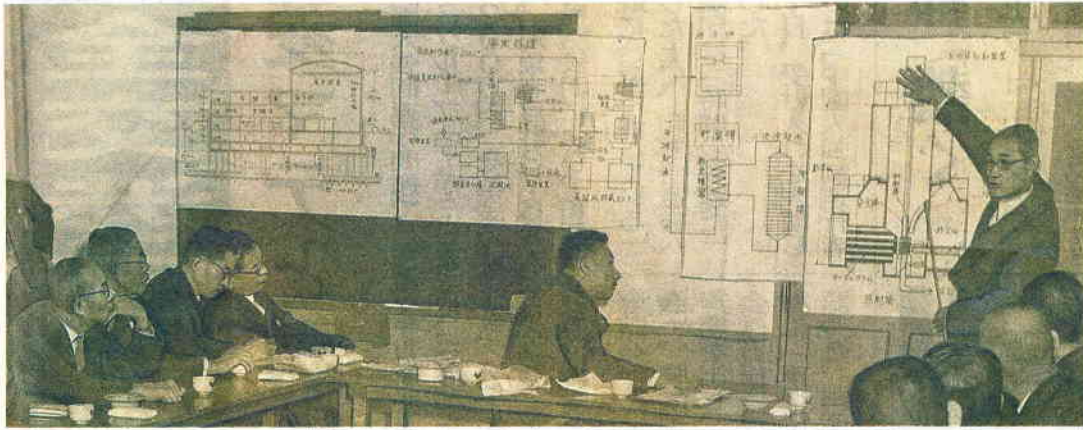
しかし、地元選出の国会議員は「これからは原子力の時代」と取り合わない。平岡さんから反対同盟はヒラをまき、京都府庁や官庁を回り、湯川博士にも直談判した。京大側は宇治小で57年1月25日、住民説明会を開いた。反対住民ら約600人が集まった。京大側は、原子炉を厚さ3ミリの鉄板で囲み、建屋を盛り土に設置する計画だった。「排水は十分処理して宇治川に流します」「これからは原子力」「みなさんには迷惑をかけない」と繰り返した。

28面に続く

国会での訴え、住民署名…宇治原子炉案は撤回



「絶対安全」の危うさ強調



宇治市木幡に計画された原子炉設置問題は国会に舞台を移した。1957年2月21日の衆院特別委員会。日本初の反対運動である宇治原子炉設置反対期成同盟幹事で、茶業者の川上美貞氏が参考人に立った。住民約1500人の署名が背中を押した。

「十分の設備とまた細心の注意をせられても、落ち度がないとい

う」。原子炉が抱える地震や水害など災害リスクや汚染水対策への不安に加え、特に強調したのは人的ミスの恐ろしさだった。

予定地だった東宇治地域にはその12年前の戦時中、広大な陸軍の火薬製造所と火薬庫が広がっていた。37年8月16日夜の大爆発では複数の死者を出し、1・5キロ離れた川上氏宅の屋根も吹き飛ばされた。敗戦による解体時も爆発事故



●京都市伏見区で原子炉の図面を示して説明する京大関係者—1957年2月
●京都市議会で原子炉案を説明する湯川秀樹博士(左)—同年3月

「この記憶はなまなまと、いまだに忘れることはできません」。戦争の記憶は鮮明だった。

地元住民からすれば、何も知らされずに宇治案は突然に降ってきたようなものだった。既成事実を先に作り、なし崩し的に決定する。そう映った。川上氏は「原子力の3原則には公開、民主的とあるが、民主主義に反するものはなほだしい。学者の良心も疑う」と論陣を張った。

「阪神600万住民の給水源に設けるのは公衆衛生上、遺伝子学上きわめて問題」だと、続いて大阪府議会の大橋治房議長が陳述していた。「地震について何一つ考えられない災害が来たらどうなるのか」「コンクリートや鉄板で二重三重に包んでみても、排水処理が完全に行われなければ安心できない」。研究のためなら人間の命はどうでもいいのかと、再考を迫った。

対して京都大教授が絶対の安全を強調。「すべての物理学者も、原子炉が原子爆弾のように爆発することはないということについては意見が一致している」「放射性物質が外に出ることはまず考えられない。宇治川へは一滴も流さない」と反論した。その論点は約半世紀後、福島原発事故で苦く、繰り返されることになる。

宇治原子炉に反対する流域住民の声は高まった。湯川秀樹博士は設置準備委員長を辞任。宇治案は撤回に追い込まれた。

大阪府高槻市などの候補地が浮かんで、反対運動で立ち消えになった。一方で京都府和束町や滋賀県木之本町(現長浜市)では、活性化につながると、誘致運動もあったという。60年に大阪府熊取町と決まり、京大原子炉実験所として3年後に開設した。

立地問題に奔走し、原子炉実験所初代所長を務めた京大の木村毅一教授は74年、講演で当時の研究者の姿勢を反省している。

「象牙の塔にもっとおりましたので、人々の細かな心理状態が分からなかった。科学的に自信があればそれでいいんじゃないかという考えを、どこまでも主張していたことは事実です。肌で感じる恐怖心、これは原子爆弾を受けておりますので、反対されるのも無理とはいえないのであります」

原子力関連施設の立地は都市部を避け、沿岸部の地方という日本の構造は、宇治の設置反対運動が原点ともいえる。「原子炉はどこも地方にある。東京に電力を供給する原発は福島にあったし、京都に電力を送る原発も福井だ」と、宇治の原子炉反対運動に携わった平岡久夫さん(79)は話す。

「この記憶はなまなまと、いまだに忘れることはできません」。戦争の記憶は鮮明だった。

地元住民からすれば、何も知らされずに宇治案は突然に降ってきたようなものだった。既成事実を先に作り、なし崩し的に決定する。そう映った。川上氏は「原子力の3原則には公開、民主的とあるが、民主主義に反するものはなほだしい。学者の良心も疑う」と論陣を張った。

「阪神600万住民の給水源に設けるのは公衆衛生上、遺伝子学上きわめて問題」だと、続いて大阪府議会の大橋治房議長が陳述していた。「地震について何一つ考えられない災害が来たらどうなるのか」「コンクリートや鉄板で二重三重に包んでみても、排水処理が完全に行われなければ安心できない」。研究のためなら人間の命はどうでもいいのかと、再考を迫った。

対して京都大教授が絶対の安全を強調。「すべての物理学者も、原子炉が原子爆弾のように爆発することはないということについては意見が一致している」「放射性物質が外に出ることはまず考えられない。宇治川へは一滴も流さない」と反論した。その論点は約半世紀後、福島原発事故で苦く、繰り返されることになる。

宇治原子炉に反対する流域住民の声は高まった。湯川秀樹博士は設置準備委員長を辞任。宇治案は撤回に追い込まれた。

大阪府高槻市などの候補地が浮かんで、反対運動で立ち消えになった。一方で京都府和束町や滋賀県木之本町(現長浜市)では、活性化につながると、誘致運動もあったという。60年に大阪府熊取町と決まり、京大原子炉実験所として3年後に開設した。

立地問題に奔走し、原子炉実験所初代所長を務めた京大の木村毅一教授は74年、講演で当時の研究者の姿勢を反省している。

「象牙の塔にもっとおりましたので、人々の細かな心理状態が分からなかった。科学的に自信があればそれでいいんじゃないかという考えを、どこまでも主張していたことは事実です。肌で感じる恐怖心、これは原子爆弾を受けておりますので、反対されるのも無理とはいえないのであります」

